WINDと御前崎の未来 3

石原智央日本ウィンドサーフィン連盟理事長に
御前崎のウィンドサーフィン事情と将来の展望を聞いた

五輪選手が育つ土壌 観光の目玉にもなる

「ウィンドサーフィン愛好者の誰もが、御前崎の海の良さを知っていると思います。海外にも匹敵するコンディションなんですよ。御前崎は、過去に『サムタイムワールドカップ』というウィンドサーフィンの世界大会が10年余り開催されたほどの場所なんです。週末ともなれば、海岸沿いの駐車場が埋め尽くされるほど愛好家たちが集まります。御前崎の海はまさに宝です」と石原理事長。さらに「こんなにも恵まれた土壌があるのに、地元の人でウィンドサーフィンをやっている人は少ないんです。特に子ども。この環境ならば、オリンピックに出場する選手がたくさん輩出されますよ」と続ける。

ウインドサーフィンの最大の魅力は、大自然の素晴らしさをダイレクトに体で感じられること。ウインドサーフィンというと激しい競技と連想しがちだが、弱い風でのんびりクルージングを楽しむことや二人乗りもできる。老若男女問わず、誰でも楽しめることから、40歳～50歳の愛好者も非常に多く、50歳でウインドサーフィンに出会って、60歳で現役という人も珍しくないという。家族で楽しめることも、このスポーツの大きな魅力。ヨーロッパでは、ファミリースポーツとして親しまれており、生涯スポーツとしても見直されてきている。

「一度、体験してもらいたいです。夏にはマリンパーク御前崎でスクールも実施されています。ウィンドサーフィンの楽しさを、市内外の大勢の人に感じてもらえたらうれしいです。観光の目玉にもなるでしょう」。

日本ウィンドサーフィン連盟理事長
石原智央さん

取材を終えて

御前崎の冬の風物詩ともいえる「遠州の空っ風」と呼ばれる強い西風。朝の通勤時には、その強風にもがきながら登校する小中学生の姿を目にする。

大会会場での取材では、誰もが御前崎の海を「最高のコンディション」と話していた。強い西風、ビッグウェーブ。聖地と呼ばれるにふさわしい環境だということを再認識した。週末には他県ナンバーの車が海岸沿いの駐車場を埋め尽くしている。中には鹿児島県や岩手県のナンバーも見られる。風が人の往来を生み、地域経済にも寄与していた。生活するには煩わしいと思う風も、重要な地域資源だったのである。

近年の観光客は「体験型の観光」を重要視する傾向にある。まちの観光の起爆剤となり得るウィンドサーフィンだが、御前崎に住む私たちが経験したことがなければ、観光客に楽しさを伝えることはできない。まずは、知ること。そうすることで、愛着が湧き他市町の人にも自慢できるまちのスポーツ・観光資源になる。さらには、そのきっかけが御前崎から五輪選手を輩出することにもつながる。

風（WIND）と生きる　終